

勉強にひたすら励んだのであります。

このような毎日の生活態度であつたので、心の底から起こる淋しさを解消し、又、これに克つことが出来たのだと思います。

引き揚げ苦勞の体験記

千葉県 石渡 郁子

父が台湾総督府通信部航空課にパイロットとして勤務していた関係で、昭和十年六月、台湾台北市佐久間町で出生。その頃、祖父は浅草で工場を持ち、何人かの使用人をおき、薬剤師として仕事をしておりましたが、母が二人姉妹の長女でしたので、工場を処分して祖父母は台湾へ永住のため、十三年に台湾へ移つてきたのです。その年に祖父は亡くなりました。

その当時は、敗戦なんて夢にも思わなかつたことでしょう。そして終戦を迎え、二十一年基隆から再び内地へと。引揚げでは写真一枚も持たず、きびしい検査

を受け、現金は一人千円、衣類は一人何キロと制限がありました。お金に代わる値打ちのある品物を選び、リュックや、柳行李に詰め、一家そろつて引揚げ、四月上旬、鹿児島県へ上陸したのです。

船中では、船酔いで、何も食べられず、排便もその場でバケツに用をたし、まさに味噌も糞も一緒とはあのことを云うのでしょうか。

鹿児島で一泊、早朝いよいよ本籍地東京へ出発と云う時に一番大事にして持つて来たリュックが盗まれていたのです。両親達はどんなに口惜しかつたことでしょう。苦勞してやっと内地へたどり着いたのに。子供の私でさえそれが良く判りました。そして鹿児島から東京、そして千葉県館山へと休む間もなく夜中にたどり着きました。当時は、内地との通信はままならず連絡不十分のまま、館山の遠縁を頼つて来たのです。そして三か月ぐらいお世話になりましたが、私達のもつて来た砂糖があるうちは良かったものの、残り少なくなつてくるにつれ、手の平をかえすような態度に居づらくなり、山の中の兵舎へと移りました。そこにはま

だ兵隊さんが三人残っており、私共初め、サイパンからの引揚者と、東京からの疎開でこられた二世帯の方達との生活が始まりました。

父は生活のため、官吏から一変して行商人、なりふりかまわず働きました。母が病弱でしたので、長女の私が父と一緒に買い出しや、行商について行ったことも。また物々交換にも行きました。着物一枚でお米が一升ぐらいでしたでしょうか、私どもが思っていたよりも安く言われ、びつくりするほどでした。たちまち着物はなくなりました。当時は農家は強かったですね。その時のことは一生忘れません。台湾での生活とは天と地の差、本当にみじめなものでした。

毎日の生活のため、私はおとな達と一緒に山菜取りや、たきぎひろい、又、川や田んぼでザリガニ、タニシ、どじょう取り。これ等を見るのも、名前も初めて、しばらくはさわることもできず、ただおとな達のやることを見ているだけでした。そのうち次第になれてくるにつれ、一人で近くの山や川へ取りに行けるようになり、たくさん取れた時にはほめられたりもしました。

たんぼぼや食べられる草等もおぼえ、一生懸命に取りました。

このような生活の中で子供心には一番辛かったのは、学校でのおべんとうを食べる時でした。クラスほとんどが農家の子供、皆白米のお弁当、二、三人だけが代用食の、さつまいもとかぬか、ふすま入りのふかしぼんでした。私はとても丸出しにして食べることははずかしくてできず、お弁当箱のふたを立て隠して食べたり、時にはお腹が痛いとうそをつき食べずにしたこともありました。

言葉は皆が方言で話すので、私には理解できず、誤解や、話し方にも違いがあり、引揚者のくせに生意氣だとか、洋服や履物にしても田舎のことですのでもまだわらぞうり、下駄、良くてゴム靴が多く、私は皮靴でしたので、靴を隠されたり、田んぼの中へと突っ込まれたり、汚い泥だらけの手でわざと洋服になすりつけられたりして、いじめられつらく悲しい思いをいたしました。栄養失調のため、何度も朝礼の時や、運動中に倒れ、気がつくとき医務室に寝かされておりました。

一時は学校へ行くのもいやになったこともありました。学校よりも野山で何かを取っているほうがとても楽しいものでした。母は病弱でしたので、祖母が母がわりになんでもしてくれ、やさしい人でしたが、それに対して、父はとても厳しい人でした。

毎日の食事は代用食が多く、雑炊、お粥といつても名ばかり。ご飯粒なんて数えるほど、あとは野菜、かじめ等。その中からご飯粒を箸ではさんで子供達の茶碗に入れてくれる母のか細い手、なんでも自分が食べずに子供達に食べさせてくれた母は引揚げ三年目、私が十四歳の時心臓発作で亡くなりました。三十五歳でした。亡くなる前に、私が一・五キロぐらいの病院まで一生懸命に走って先生を呼びに行っている間のことでした。夫や子供達にも看取られず、淋しくこの世を去りました。あの時、医者ももう少し早く来てくれたなら、長生きできたのでは、と今でも残念でたまりません。

母が亡くなってからは、父の生活は乱れ始め、職をさがすと東京へ出て行ったきり、所在不明のありさま

でしたが、二年後元気で働いていることがわかり、ほっとしたものです。そして私は就職し、お友達ができ、すこしずつ楽しい日々が続くようになり、引揚者としての淋しさから逃れられるようになりました。

遠きに在って想うものは祖国

東京都 二瓶 忠 雄

昭和二十二年一月八日の朝、曇り空から時折り陽がほのかにもれて海面に映える肌寒い中、台湾基隆からの居留民僑一千余人が、引揚傭船撰津丸のタラップを下り、はしけに乗り移った。その中に私達家族八人が「今度こそほんとうに内地の土を踏めるのだね」と確かめ合いつつ、期待と不安の入り混じった顔を見合せ、青味がかつた遠景の中に浮かびあがる九州佐世保の町並みを見つめていた。思えば、台北市の家を、そっくり旧知の台湾人に明け渡して出て来たのが十二月十日の昼過ぎ、実に一か月におよぶ祖国への旅路であった。